

・自選五十首・



小野興二郎

おの・こうじろう 1935年、愛媛県面河村生まれ。57年に木俣修に師事し、「形成」の同人として活躍。97年「泰山木」を創刊。81年、肝生検のショックで視力、その他に障害を起し、今も後遺症に苦しむ。歌集は、『てのひらの闇』『歳月空間』『今ひとたびの』ほか6冊がある。

ねぎの束の光る土間より風は来てひえびえと父母の住む家ほほふ

東京に学ぶわれのため伐られたるかの山が見ゆ畑打ちをれば

てのひらに握りしめたる闇いまま出立の日の戦慄去らず

はくせいへのりコプターの飛ぶ空を描きしが誰も信じてくれぬ

今宵飲むビールは鉄の味にして凍きまで肉のおもひは滾る

夏草のほひまとへる母の背に灸すゑてゆく思ひ激りつつ

王子ひとり旅立たせたる物語母が読むときすすきまじきかな

盆過ぎしのちの風さへさびしきに踊子蜻蛉といふが群れ飛ぶ

興二郎に酒を沸かしてやれやとふこゑさへすでに衰へましぬ

遠山の木の間がくれの辛夷の花こゑあげて泣きしのちの眼に見ゆ

父よ男は雪より凜く待つべしと教へてくれてありがたう

『てのひらの闇』(一九七六年)

『天の辛夷』(一九七九年)

自選も一歌集十首選からはじまって、歌集の数が多くなってからは三十首を数回自選している。その自選の歌を見ると、歌がみな異なっている。歌誌などでとり上げられると、自選の中に入れていないので次の時に入れたりする。

今回は若い時の歌を多くしていたら、最後の歌集の作品が少なくなってしまった。私は四十六歳の時、肝生検で起こしたショック後遺症のため今も視力などが正常でなく、肝臓を病み続け、月一回の病院通いは欠かせないでいる。

幸いなことに歌を作ったり文章を書いたりできるのは、神仏の助けあってであろうか。

「物がその物と見えない」と言っても、元氣

母を率^みて旅ゆく島にバスを待ついま母ひとり母の子ひとり

福永耕二らの俳人グループと九州をめぐる

前髪まへかみの風になびきし日を思ふ聖ルドビコ茨木十二歳

ひぐらしのおもひおもひのこゑきけり清七地獄すぎてゆくころ

とりとめもなくあるまひる穀象こくさうは神の使ひのごとく近づく

妻となる日待つ汝なれかぬるみゆく水を言ふとき髪かみの光りぬ

梢つれたかく辛夷の花芽つぼみひかり放ちまだ見ぬ乳房ちちうでわれは恋ふるも

観音は蓮華座上れんげざうにひとの子のわれら地上ちじやうにつながれて佇つ

千手観音千手と言へど遊ぶ手の一手ひとてなからむことわれを搏つ

二月四日、恵太誕生

鬼は外福は内の声こゑいましてがた吾子わがこに会ひ来しわが胸むねに沁む

十一面観音

桜吹雪さくらふぶきくぐり来てあふ観音の黒き御衣みけしの裾すそひるがへる

変身へんしんのかなはば一夜ひとよ月明つきあかりに瀬せをかけのぼる山女やまめとならむ

つねのごと昏くられなむとして泰山木たいざんぎの花はなにきはまる一日ひとひの光

七月三日、由香誕生

体重たいじゆうのあるかなきかのみどり子を抱かかきかなしみ夏越えむとす

福永耕二逝く

花咲くを待たで逝いきたり佗助たすけのなんにも知らず咲くにはあらず

万面の朱あかのふたみの別わかれかな

ベレー帽べレーぼうし手に握にぎりしめ足早あしはやにわれを率みてゆく瞬まじのまぼろし

一九八一年、肝生検の途中でショックを起こし、心臓が止まり瞳孔も開く。その後遺症のため失語症となり、視力を失う

二人ふたり子はふたり子こどうしむつむなり病やまむわれの辺へたに声こゑひくくゐて

病院びやういんに通とほひて終はる夏休なつやすみみ父病ちちやまめば子のくやしからむか

青空あおぞらを一目ひとめ見てから死しにたしと思おもふひそかなるわが願ねがひごと

わが生きてゐることは夢ゆめまぼろしにあらず朝あさより雨あめふりしきる

【紺の歲月】（一九八九年）

な人には理解りかいしがたい。妻子さいしが私のさまを理解するののに十年じゅうねん近くかかった。こんな状態じょうたいの中で作る歌うたが変化へんげんを見せ、批評文ひひうぶんにいたつては大きく変化へんげんしてきたと思つている。真実まことはどこにあるのか、それを追おい求めながら言葉ことばを重ねてゆくと、自分おのれでも思おもいつかなかつた言葉ことばに出会であつてくる。

右みぎに書いた事ことはここで書くのはおかしいかもしれないが、自選じせんについて書いてみると、こんなになつてきた。本当ほんとうは最後の歌集うたしゆ『今ひとたびの』からの選出せんしゅが少なくなつてしまつたことを書かきたかつた気がする。自選じせんという作業さぎょうは、自己おのれを顕示けんじしたり作品さくひんを特出とくしゅさせたりするきらいがありそうなので、心すべき事ことと思おもう。だが、自己おのれの特色とくしよくが出てゐる歌うたを選出せんしゅしたい思おもひは強い。

歌集うたしゆというものは、人間の一生いっしやうを示すものである面おもてが強いと思おもうから、生活せいかつの断面たんぺんや自然しぜんの一面いっぺんを詠よんだものが混入こんにゅうしているのがむしろ自然しぜんである。その点てん、私の自選じせんは全体的ぜんていでないところがある。これは自選じせんするたびに思おもうことである。

とりとめもない事はかり書いてきたが、私が歌うたを作るようになつた原点げんてんに返り、自分の作品さくひんを通して自己おのれを見つめ直す。その意味いみで、歌うたを自選じせんする機会きかいを与あたへられた事は、また一つの前進ぜんしんの契機けいきと思おもつてゐる。

追ひつめてゐたりしものは何ならむ夢よりさめてまたしんの闇

ふれ合ひて時に火の粉をふりこぼす妻の苦しみわれの口惜しさ

母逝く

火の中に火の動く見ゆ母はしも耕やすことを火種となしき

恵太、中学生となる

初陣の日の若武者のごとくあれ入学式に行くを見送る

春秋の風呼ぶ雲のゆくところ母なる面河われのふるさと

かの木にはその木の祈りありてこそかく咲きにけむ遠山桜

木には木の言葉のありてこの夜も星美しと言ひあひてゐむ

言ひたきのあらむ限りを散りつくし裸となれる木か光りあふ

形見なす日は月はかく往くものかここ掘れと啼く犬もあらなくに

魂魄は石にもありて 雨過ぎしのちさめざめとかけろふ立たす

世の中を狭く行くかとわれに言ふごときかフランスよりの絵葉書

まぼろしをふりこぼしつつ行くものか暮れてまぎれぬ遍路の笠は

石鍬の山ゆ村へとくだる水 洗ひて今にわれをあらしむ

大西民子急逝

大宮の家 翼なす言葉いくつ 今ひとたびのいのちもがな

修忌(木俣修先生)

花咲かばいのちと思へ歌あらば道とし思へわが天はあり

一念のたどりつきたる果てにして石の一つも鳴らしみせうぞ

歳月の錆いぶしつづゆれもどる今生にしてわが壺天変

たちのぼる火ともなれかし一念は石をも貫くと言はるるからに

血の流れゆく音はかくたへがたくありけむものか夜覚めてゐつ

いまわれはひとり砂漠にあるならむ駱駝の瘤のひとつつかみて

「森林木語」(一九九四年)

「今ひとたびの」(二〇〇〇年)